

仕事帰りに駅の東口を出ると、雨音がしなかった。私は信じられずに夜空を仰ぎ、それから手のひらを上に向けた。濡れない。秋の終わりから連日のように降り続いていた雨がようやく止んだ。北陸地方では大変珍しいことである。私はとても晴れやかな気分になり、いつもより長いバス待ちの列にも、定刻を過ぎても現れる気配のないバスにもまったく苛々しなかった。

傘が邪魔だな、と思った。長さ八十センチの紺色の傘のハンドルを手持ったり腕にかかけたりしているうちに、コンビニの前に置かれた傘立てが目に入った。あそこに置いてきてしまおうか。しかし盗まれるかもしれないし、すぐに処分されてしまうかもしれない。傘はこの一つしか持っていない。もう少しの我慢だと自分に言い聞かせていると、十分遅れでバスが到着し、のろのろと動き出す列に続く。その時、目の端に強烈な色が映った。

黒地にピンクのドット柄。縁がフリルで飾られている、派手な傘を差した女性が駅の壁を背に佇んでいる。顔は隠れてよく見えない。雨が止んだことを教えてあげたかったが、乗る順番が来てしまったので諦めてそのまま帰宅した。

翌日は朝から晴れていた。私は傘を持たずに出掛けられる奇跡に感謝し、夕方になると一刻も早く帰らなかったのだが急に頼まれた仕事にてこずり、家の最寄り駅に到着したのが夜の九時半だった。それでも、傘という荷物がないだけで身も心も軽かった。いつもであれば仕事の鞆を忘れても傘だけは必ず持っているのに。私は傘という呪縛から解放された人々を、革命を成し遂げた民衆さながらの気分で見渡した。ケーキの箱を慌ただしく抱えるサラリーマン、真っ白なスニーカーでランニングをする女子大生、手を繋ぎながら歩く老夫婦、ピンクのドットの派手な傘……

昨日の女性がいる。誰かを待っているのか、駅の構内を気にしている横顔がちらりと見えた。化粧が濃いのが、顔に刻まれた皺と黄ばんだシミはごまかせない。七十代くらいだろう。服装も傘に劣らず派手で、レースのあしらわれた薄いピンクのワンピースを黒いダウンコートの下に着込んでいた。

なぜ、傘を差しているのだろうか。私は彼女を凝視した。朝は見かけなかったので昨日からずっと立っているわけではないだろう。日傘だとしたら、この時期の日没は四時半くらい

なので、五時間も待ちぼうけを食らっていることになる。

「あの」

私はほとんど迷いなく話しかけていた。女性は数秒、話しかけられたことに気付いておらず明後日の方を向いていたが、私の姿を認めると「はあ」という気のない返事に相反して目を見開いた。

「晴れていますよ。それに、もう空は真っ暗です」

「ああ……そうよね。でもわたし、何だかいつも雨が降っている気がするの」

「そりゃあ、この辺りに住んでいて晴れている日なんて砂漠の水くらい稀少ですから。私が言いたいのは、どうして折角の晴れ間に傘なんか差しているのかということです」

女性は眉を顰め、心なし距離を取り、交番の方を見やった。変な奴だと思われたのか。

私は頭に血が上った。

「どうして解放された世界に水を差すような真似をします！ あなたは、そう、まるで冷酷無慈悲な独裁者の使い魔だ！」

「おばあちゃん！」

無垢な声にはっとした。駅から五歳くらいの、幼稚園か何かの制服を着た男の子が女性に向かって駆け寄ってくる。

「早く帰ろう」

「ええ」

女性は顔を綻ばせ、傘を持っていない方の手で男の子の手を取り、歩き出した。

私は納得した。あの派手な傘は、孫が祖母を見分けるための道具だったのかもしれない。それを知らずにムキになった私は己の身勝手さを恥じた。しばらく彼らの後ろ姿を眺めていたが、バスの最終便の時刻が迫っていることを思い出して乗り場へ急ぐ。

「あなた、一体何を考えているの!?!」

私はビクツと体を硬直させ、恐る恐る振り返った。先ほどのやり取りを咎められたのかと思ったが、違った。傘の女性に向かって、緑色のスーツを着た中年女性が狐に似た目をさらに吊り上げて怒鳴っている。

「非常識ではないですか？ 小さな子をこんな夜遅くに外出させるなんて！」

確かにあまり健康的ではないのかもしれないが、家庭の事情は様々だ。無理矢理連れ出しているわけでもなさそうだし、責められるいわれはない。私は自分のことを棚に上げて傘の女性に同情した。

しばらく様子を見守っていると、不可解なことが起こった。男の子が傘の女性の手を離し、スーツの女性に駆け寄ったのである。中年女性は思い出したように、肩にかけた鞆から黄緑色の折りたたみ傘を取り出した。

澄んだ夜に、異彩が放たれる。男の子はさも自然にその傘に入り、中年女性と手を繋いで横断歩道を渡って行った。ピンクの傘の女性はそれを止めることなく、傘を閉じると駅の中へと消えて行った。

男の子が一度、私の方を振り返ってニコツと笑った。もうすぐ雨が降る、と気付いた時、バスが私を置いて発車した。